竹取物語伊勢物語必携

鈴木日出男・編

學燈社

鈴木日出男・編

竹取物語伊勢物語必携

學燈社

鈴木日出男編

竹取物語伊勢物語必携

物語成立史覚え書き——貴種流離と色好みと　鈴木日出男　6
竹取物語・伊勢物語のことば　山口　仲美　14
伊勢物語の絵画化　田口　栄一　21

竹取物語

物語の出で来はじめの親　藤井　貞和　40
主題と表現　小嶋菜温子　45
かぐや姫論——変化のもの　高橋　亨　51

竹取物語を読む

梗概＊話型＊系譜＊引用・逆引用＊人物＊表現と方法

編・鈴木日出男
小嶋菜温子
島内　景二　58

1 生い立ち 59
2 求婚 62
3 難題譚
1 仏の御石の鉢 66
2 蓬萊の玉の枝 70
3 火鼠の皮衣 74
4 龍の頸の玉 78
5 燕の子安貝 81
4 帝の求婚 85
5 昇天 89
6 富士の山 93

享受研究の現在

河添房江 97
阿部好臣 104

伊勢物語

成立 増田繁夫 112
主題と表現 長谷川政春 119
業平論——作者のかたる業平像 石原昭平 125

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

伊勢物語を読む

要旨＊話型＊源氏＊引用・逆引用＊人物＊和歌＊説話

1 元服と死 133
2 二条后を想う 135
3 東国に下る 139
4 斎宮を恋う 144
5 惟喬親王に親しむ 147
6 老いゆく 151
7 鄙に下る 156
8 運命を嘆く 159
9 女を盗む 163
10 肉親を思う 166

編・鈴木日出男
河添房江
小林正明
鈴木日出男

132

古註釈の世界　島内景二　170

研究の現在　高田祐彦　176

＊　＊

伊勢物語類歌索引　鈴木宏子・吉野瑞恵　183

伊勢物語系図　鈴木宏子　196

伊勢物語年表　同　198

＊　＊

竹取物語・伊勢物語要語解説　池田節子　高田祐彦　204

あだ・まめ／あはれ／うし・つらし／すずろ／つれなし／なまめく／みやび
男・女／垣間見／狩／雪月花／罪／光／変化／世の中

あとがき　214

物語成立史覚え書き

——貴種流離と色好みと——

鈴木日出男

一

古来いわれてきたように、『源氏物語』のいわゆる玉鬘十帖の物語と『竹取物語』とは、姫君求婚譚、あるいは貴種流離譚という点で相似の関係にある。頭中将と夕顔の間に生まれた玉鬘は、幼くして北九州に漂泊するようにして育ち、二十歳の女盛りになってから六条院に迎え取られて源氏の養女になった。そして、実父内大臣（頭中将）にも会えぬまま、大勢の求婚者たちに言い寄られ、しかも義父源氏の懸想に苦悩するようになる。源氏による名高い物語談義は、一面では玉鬘への屈曲した恋を語ってもいるのだが、そのなかで源氏が、〈昔の物語のなかにも、自分のように律義な愚か者の物語なぞあるものでない。また物語のなかにはひどく世間離れしている姫君もいるが、あなたのように冷淡でとぼけたふりをする女はいない。だから、あなたと私のことを世にも稀れな物語に仕立ててみようかしら〉と口説いてみせると、玉鬘は〈そんなことをせずとも、義父が養女に言い寄るという類稀れな話は、そのまま世語りになるにちがいない〉と反発している。特に玉鬘の言う、義父の懸想は類稀れな話だとする点に注目されよう。もともと物語は世にもめずらしい話柄であるのだから、これは物語以上に物語的だということになろう。

このように六条院の求婚の場にさらされる玉鬘の物語は、永住すべき故地や肉身から離れて孤独に生きなずむ女君の物語になっている。したがってこれもまた、北九州での漂泊の前半生とは異趣ながらも、やはり貴種流離の一変型として構成されているといえよう。北九州の鄙という異界にさまよった玉鬘は、さらにまたもう一つの異界、六条院に放たれたのである。『竹取物語』のかぐや姫が、不老不死の理想郷である月の都から、「はかなく」も「穢な」い地上にひとり降りてきて大勢の男たちに求婚されるのと、同様だといえる。そのかぐや姫は、帝の求婚をも拒んだところで、ついに月からの迎えに伴われて昇天してしまう。それと対応するかのように、玉鬘もまた、意外にも鬚黒という人物の妻に収まり、冷泉帝の所望をも源氏の懸想をもふり切って六条院から出てしまう。ちなみに、玉鬘はその後、源氏四十賀に若菜を献じた以外、ほとんど源氏の回想にしか登場しない。あたかも異郷に遠ざかっていた貴種の姫君が、ついに故郷に還る趣である。その彼女が物語に再登場するのは六条

院の世界の終った竹河巻であり、以前の女主人公とは面目を一新して、姫君たちの結婚問題に苦悩する家刀自の風貌を前面におし出している。

もともと貴種流離の原型は、異郷の神がこの世の中にやってきてさまざまな苦難を経験することだといわれる。神話本来の発想としては、人間世界の驚異的現象を、神々のさまざまな苦難の行状として捉えながら共感するのであるから、そこに信仰的な感情がひき起こされることにもなる。また記紀のように一面では国家的な論理によっている神話では、人間世界に来臨した神々の労苦によって国作りが実現したということにもなる。スサノオやオオクニヌシも、その範疇に入る。そのオオクニヌシの国作りを援けた小さく幼い神スクナビコナもまた、その典型とみられよう。その小さな神は、海のかなたから漂着し、その苦しい任務を終えると粟がらにはじかれて常世へと還っていく。こうした記紀の神々の来歴は、苦難と栄光にこそ満ち満ちてはいても、必ずしも悲劇的ではない。貴種流離が貴種流離としてより悲劇的な様相を呈するのはおそらく、神と人間の調和的な神話世界がその均衡を保ちえなくなるところからであろう。そのことは、その神話的世界観を生活的信仰的に支えていた共同体の喪失ということと不可分の関係にあるはずである。

『竹取物語』に強固にふまえられている天の羽衣説話（白鳥処女説話）もまた、異界から天女が天降って受難の憂きめに遭う貴種流離譚の一種とみなされる。逸文の『近江国風土記』の伊香小江の伝説や『丹後風土記』の奈具社の伝説などよく知られているが、ここで後者『丹後風土記』の例に即してみよう。天降った天女八人のうち一人だけが、ある老夫婦に天の羽衣を隠し取られて昇天できず、仕方なく夫婦の娘となる。夫婦は十余年間にわたり天女の醸造する美酒で財を成して富み栄えたが、後に天女をわが娘ならずとして家から追い出してしまう。追い出された天女は、里人に、「久しく人の世に沈みて天に還ることを得ず。また、親しき者もなく、居らむすべを知らず。吾、いかにせむ、いかにせむ」と涙ながらに語って、ひとり天を仰いで次のような歌を詠む。

天の原ふりさけ見れば霞立ち家路まどひて行くへ知らずも

ここではまず、天女が安住の地を喪ったと嘆くように、現実の世界がどんなものか明確にされている点に注意されよう。老夫婦は天女の神の子としての威力に莫大な財を獲得しながらも、歳月の経過とともにその恩恵を忘れ、「汝は吾が児にあらず。しまらく仮りに住めるのみ。早く出で行きね」と天女を追い出してしまうのだから、天女の前にはいかにも地上の無情な現実が横たわっている。今日の逸文の本文は今井似閑の採択によるものだが、それによれば、もともと羽衣を隠し取った夫婦とそれを返してほしいとする天女との間に、次のような対話が交されている。

天女の言ひけらく、「凡て天人の心ばへは、信を以ちて本となす。何ぞ疑ひ多くして、衣を許さざる」と言ひき。翁答へけらく、「疑ひ多く信なきは人の世の常なり。かれ、この心を以ちて許さじと思ひしのみ」と言ひて、……

このように人の心は信じがたいことを根拠に羽衣を隠し取った夫婦は、後には天女を追い出すことになるのだから、自ら人の心の信じがたさを証したようなものである。これは、天上世界とはまったく隔絶したものとしての人間世界を設定していることになり、『竹取物語』でいえば飛来した天人たちが、地上世界を「はかなく」「穢き」所だなどと言って、天上の不老不死の理想郷と区別するのに対応している。このように、流離する世界がその貴種の原郷とどれほ

どかけ離れているか、言いかえれば願わしかるべき理想郷を見る目を通して漂泊する地がいかに安住しがたい世界にみえてくるか、という相対化によって、貴種流離の悲劇性がきわだってくるのではないか。ちなみに、前掲の『丹後風土記』の夫婦と天女の「信」と「疑ひ」の問答は、『古事記裏書』にも存しないところから伝承本来のものではないといわれる。伝承が物語化していく道程の一現象と思われる。ここでは、異郷から訪れた神々の苦難や犠牲が現世に恵みを与えているのだという神話的共感も薄らいで、人間そのものへの関心に移っている。前述の『竹取物語』における天人たちの地上を見つめる目も、人間世界を相対化する視点になっているにほかならない。神話において人と神の調和を語った貴種流離は、物語においては神と人との訣別、人間の悲劇的な孤立を語るようになる。

天女の「天の原……」の歌は、そうした人間の心の表白とみるべきである。この歌は、さすらう女の嘆きそのものを証している。ちなみに、前述のスサノオやオオクニヌシの場合、人の心や土地を占有する呼びかけの歌こそあれ、このような詠嘆の歌はない。また、そこを立ち去った天女は、荒塩の村に至って、わが心は荒潮のように騒ぎ静まらないと語り、哭木(なきき)の村を訪れて枕の木に寄りかかって泣き、そして奈具の村にまでやってきて、自分の心はようやく慰められたとしてとどまった。それが奈具の社に鎮坐する農耕神、豊宇賀能売命だという。このように地名起源説話を含んでの、典型的な神の巡訪譚となっている。ここでは、漂泊の地の現実世界が相対化されることによって人間としての存在が浮かびあがり、そして歌という表現の具を通して漂泊の心が定着してくるということである。

いったい、悲劇的な流離の人の心の表現に、歌は抜きがたく重要であったとみられる。『古事記』のヤマトタケルの悲劇的な東征の物語に数多くの歌が挿入されていることをも想起されたい。もっとも、ヤマトタケルの場合、いかにも記紀の大王らしい一面をも備えていて、その歌々にも人心や土地の領有を証す発想の一面がある。たとえば、大和への帰還を直前に詠まれた名高い望郷歌「倭は　国のまほろば　たたなづく　青垣　山隠れる　倭しうるはし」にしても、一面では占有する土地の繁栄を予祝する国ほめ歌である。あるいは、オトタチバナヒメが海の嵐を鎮めるべく自ら犠牲となって入水するという挿話。そこで「さねさし　相模の小野に　燃ゆる火の火中に立ちて　問ひし君はも」と詠まれる歌は、自分の魂がいかにヤマトタケルに占有されているかを証す言葉だといえよう。ここには、女たちの魂を惹きつけてやまない王者の美徳が象徴されている。この歌には、自らの死への悲しみとともに王者への讃美がこめられている。あるいはまた、ヤマトタケルと酒折の老人との歌の掛けあい、「新治　筑波を過ぎて　幾夜か寝る」「かがなべて　夜には九夜　日には十日を」。この歌いあいによって老人は東国の首長としての姓を与えられたというのだから、歌は旅人の心を表すとともに、国家的な帰属の問題をも含んでいる。こうしてこの物語は、ヤマトタケルの死と再生の結末に近づくにしたがって歌の数が増大していくのだが、その歌々は単に一個の悲劇的な心情を証すだけとは限らない。死後、肉身たちによって詠まれる葬歌にせよ、それが歴代の天皇の大御葬の歌になったというところからも、国家的な一面を否定することができない。一面では国土領有の王者の風貌を見せながら、一面では魂の孤独を見せている。その二つの面をきわどく繋ぎとめているのが、ほかならぬ歌の表現力ではないだろうか。神神や王者たちの物語と人間の物語との境界に位置しているように思われる。

歌は本質的に、個人的な心を表す言葉であるとともに、社会的な関係を繋ぎとめる言葉である。ヤマトタケルの物語が王者の孤心を形象しえたのは、そうした歌の二面性に支えられているからである。そして、とりわけ、この歌の一面でもある個人的な言葉としての抒情性が、漂泊する人間の心の表現を発達させたことは、前掲の逸文風土記の例からも疑う余地のないところである。その延長上に『伊勢物語』の達成もあるわけだが、そのように物語として成書化される以前から、すぐれた人物の漂泊の話が歌をもって伝承されていたらしい。『古今集』には、流罪になって隠岐島に赴く小野篁の歌や、事件に連座して須磨に流謫する在原行平の歌が収められているが、それらは歌による貴種流離の伝承があったことを証してくれよう。

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣舟
（羇旅・小野篁）

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ
（雑下・在原行平）

前者の歌では「海人の釣舟」への呼びかけになっている点に注意したい。それが無生物であるだけにいかにも孤独な表現となって、万事を諦めざるをえない別離の悲情が、わめくこともなく静かに吐露されている。それにしても、呼びかけという一種の挨拶性は、和歌のもう一面である、人間関係を構成する社会的な言葉である。ここでは、「人」との関係性によってかえって孤独がきわだち、しかも享受における人々の共感をさえ産み出していよう。後者の「わくらばに問ふ人」への「……と答へよ」の呼びかけもまた、同様である。歌の社会的な言葉が、歌の詠み手の人間関係を突き抜けて、享受者との関係をも志向しようとしているであろう。

『伊勢物語』の東下りの一連の章段は、いうまでもなく貴種流離の典型である。たとえば、その短小の一段に、

昔、男ありけり。京にありわびて、東に行きけるに、伊勢、尾張のあはひの海づらを行くに、浪のいと白く立つを見て、
いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる浪かな
となむよめりける。
（七段）

とある。この歌は独りで詠んでいるのだから独詠歌には相違ないが、「浪」を擬人化して、それに呼びかけるところから表現されている点に注意したい。どんなに海辺に激しく打ち寄せてきても、もとに返っていくことのできる波を相手に、都には帰れぬ自分を見つめることになる。詠みかける相手をとらえることによって、わが漂泊の身の孤独をかたどっている。『伊勢物語』には多くの独詠歌が含まれるけれども、そのどこかに対人性が含まれている。そのような性格について、かつて次のように書いたことがある。「相手に向けて発想することによって、かえって自らの心を証すことができているのである。むしろいっそ、贈答歌の片われとか、不在の相手との贈答歌とみる方が、この物語の本質に近いであろう。ここでの歌は、心の密室的な独白である前に、相手への呼びかけという機能を強く発揮している。（中略）この物語では、前述の、相手に向けて歌いかけざるをえない立場に作中人物を立たせるという物語の方法を通して、特に対人意識を強調し、歌によるしかない独自な人間関係を構成しているのである」（拙稿「伊勢物語の和歌」、『一冊の講座　伊勢物語』所収）と。

いったい『伊勢物語』は、東国への漂泊を語る諸段に限らず、全編が広義の貴種流離の物語であるともいえるだろう。何よりも、世

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

俗のしがらみに抗してそこから逸脱しようとするところに、己が人間的な存在を証そうとしているからである。その反乱する心をもって立ち向かわざるをえない受難の世俗社会こそが、主人公昔男にとっての流離の地の現実であるといえよう。そして歌は、世俗に反乱する心のかたちとして定位してくる。しかも、その歌は物語内部に新たな人間関係を構成する。たとえば、高子（二条后）入内後の、ぬけ殻のようになった邸を訪れて回想する章段の、

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして

（五段）

の歌も、喪失した相手への問いかけを前提に詠まれているのである。そのことを通して、わが身と心の分裂、ひいては彷徨する魂のありようを自問自答することになる。こうして『伊勢物語』の一段一段が、その歌によって反世俗的反日常的な新しい人間関係の一つ一つを構成していく。その、一個の人間の事蹟としては容易に考えがたいほどの多岐にわたる昔男の反俗的行為が、各章段間の独立性と連続性との関係によって、人さまざまの普遍的なあり方として形象されていく。

ここでようやく、冒頭の、『竹取物語』をふまえた『源氏物語』玉鬘十帖の問題に戻ることになる。かぐや姫が「はかなく」「穢き」地上で大勢の求婚者を拒まねばならない苦難を経験したように、六条院世界にはまりこんだ玉鬘もまた義父源氏からの懸想に苦悩しなければならなかった。それが、それぞれ流離する貴種たちを苦しめる世界の現実である。前述したように、流離の現実世界がいかにも貴種たちの原郷とかけ離れたものとして設定されるところに、神話ならざる物語の地平が拓かれてくるのである。

ところで、かぐや姫にしても玉鬘にしても、彼女たちを悩ませ苦しめる流離の地に、最後にはなじみすぎてしまったという新たな問題をも生み出している。流離を終えてその地を去らねばならぬ結末を迎えて、かえってここに深い執着をかかえこんでいることに気づくのである。昇天直前のかぐや姫は、自ら帝に次のような歌を詠んでいる。

今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひ出でける

この「あはれ」は、人間的な感動を意味する。後続の叙述に「（月からの使者が）ふと天の羽衣うち着せたてまつりつれば、（かぐや姫は）翁を、いとほしと、かなしと思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひなくなりにければ……」とある。かぐや姫は、人間でなくなるその直前に、もっとも人間的な感情を持ちえたことになる。それは、単に帝や翁に対するというよりも、人間そのものに対する断ちがたい愛憐執着であるといってよいだろう。こうしたかぐや姫のあり方が、翁や帝をかえって絶望的な思いにさせることになる。翁はかぐや姫の書き残した文を見ても「何せむにか（自分の）命も惜しからむ。誰がためにか。何事も用もなし」と言って不死の薬をも飲む気にもなれず、病み伏してしまう。他方、帝は、以前に「帰るさの……」「むぐらはふ……」の贈答歌をも交して一魂をとどめたる心地」する存在であっただけに、かぐや姫なき現世に長生きすることの苦しみを思って不死の薬を焼かせてしまう。

あふこともなみだにうかぶ我が身には死なぬ薬も何にかはせむ

は、そうした悲嘆の心から詠み出された歌である。かぐや姫はその人間的な感情をもてあましながらも異界へと帰還してしまうけれど、残された帝や翁はひたすら絶望するほかない。それは、かぐや姫との関係がそれぞれ魂の次元からからめとられてしまっていたということである。深い執着ゆえの絶望であった。

玉鬘十帖の結末もまた、これによく類似している。意外にも玉鬘が鬚黒の掌中に落ちた後の源氏の悲嘆ぶりが注目されよう。とりわけ玉鬘が住みなれた六条院から鬚黒邸に転出した後の彼の悲嘆はいかにも絶望的である。二人の間に、二月の春雨のころ次のような贈答歌が詠み交される。

源氏　かきたれてのどけきころの春雨にふるさと人をいかにしのぶや

玉鬘　ながめする軒のしづくに袖ぬれてうたかた人をしのばざらめや

玉鬘とて源氏に未練があるが、それ以上に源氏の愛憐は絶望的である。その断ちがたい情念がこうした歌々の主体となって現われている。彼女からの返歌を得た源氏は「玉水のこぼるるやうに」涙に濡れるが、人目をはばかって自省するほかない。

すいたる人は、心からやすかるまじきわざなり。今は何につけてか心をも乱らまし、似げなき恋のつまなりや。

とあるところに注意されよう。自分が「すいたる人」――色好みであるがゆえに重々しい苦悩を抱えこまなければならないのだと自覚されている。源氏自身がその色好みゆえに玉鬘の魂深くに訴えかけ、逆に彼女にからめとられている存在でもあるだけに、その別離は絶望的なのだといえよう。色好みゆえに、その悲嘆は深いのである。ここでいう色好みとは、相手の魂に訴えかけてその存在を根底から惹きつけてやまない超人的な力のことである。源氏はその力によって玉鬘を惹きつけてきたのだが、ついにこれを掌中からすべり落としてしまった。こうして、かぐや姫や玉鬘という貴種たちは、現世の苦悩の世界をさまよう女君でありながらついにその埒外に逸脱することになるけれども、その異界への別離を通して、あまりにも人間的な感情をふきあげさせている。流離の歌が別離の歌に変換しながら、愛憐と絶望を歌いあげることになる。『竹取物語』の場合も、「すき」などという語こそ用いてはいないが、もともと女たちを惹きつける理想の男の力である色好みが、天なる神の後裔としてのかぐや姫に賦与されているのではないか。別離に際して帝や翁は、自分たちがいかに彼女にとらわれた存在であるかを自覚させられている。このように貴種流離が色好みをとりこむことによって、現世に流離する者がその苦悩を、この世のもともとの住人たちにもたらしているという趣だともいえようか。もともと色好みは前述したように超人的な美徳なのであるから、貴種流離の貴種たりうる資質として二者が結びつくのは当然かもしれない。しかし、それをもっとも積極的に統一づけようとしたのが、ほかならぬ『源氏物語』であったと思われる。

二

光源氏の須磨・明石へとさすらう物語は貴種流離の典型であるけれども、じつは源氏の生涯の物語そのものが広義の貴種流離の結構を備えていると考えた方が考えやすくなるだろう。彼はその天賦の超人的資質ゆえに、成長とともに世俗的な体制にいよいよなじまなくなっていく。安住しがたい世俗社会こそ、源氏にとっての流離の世界であった。葵の上と結婚して権勢家右大臣の婿になるけれども、そこにはおさまりきれない。父帝最愛の后藤壺に恋いこがれつつ、さまざまな恋に彷徨するほかない。まさに魂の流離ともいうべき人生を生きようとする。そこに、源氏固有の色好みの美徳の力が発揮される。歌を武器としながら、女たちの魂をあたかも奪い取る

かのように、多様な女性交渉を次々とくりひろげていく。つまり、色好みという超人的な力に恵まれた貴人が、安住しがたい現世のなかで、反俗的な恋に生きることを生の証しとして生きていく。

その反世俗的な恋という点では、『伊勢物語』の昔男とも共通している。しかし『伊勢物語』の場合、その人生が持続的統一的には形象されないのであり、人間普遍の恋の共感としての断片断片の累積でしかない。光源氏の場合、容易に実現することのできない藤壺への恋を原点としながら、統一的な人生を生かされている。現代のわれわれには支離滅裂にも思われる彼の恋の人生は、古代の理想の大君たちが恋を媒介に人心と国土を領有しえたのと同様に、色好みの王者としては統一的である。彼の恋は、相手の存在そのものを領略しようとする。彼はしばしば一度でも関りを持った女君を捨てることがないとして称揚されるが、それこそが色好みの美徳といえよう。その恋は常に、相手を自らの傘下に組みこめてしまう人心管理の力をも発揮させているのである。藤壺との不義から出生した皇子が後に冷泉帝として即位し、それによって源氏は知られざる帝の父として異例の栄耀の途をたどることになるのだから、物語の根幹をなす藤壺との恋も単なる恋に終始してはいない。また、彼の人生とともに関ってきた女君たちを六条院、二条院あるいはその東院に集めてその心を繋ぎとめていくのは、まさにその色好みの人心管理の力によっていよう。もちろんそれは、彼の反俗的な恋の結集でもあるのだが……。

この光源氏の超人的な色好みは、魂の次元に作用して人間関係を多様に構成するものであるだけに、しばしば愛憐執着の苦悩を招来することになる。前掲の玉鬘を失った彼の絶望的な思いは、まさにそれであった。もとより源氏は早くから、人間の愛執への恐れを抱いていた。北山で紫の上を見出した源氏が、僧都の法話を聞いて次のように思ったという。

わが罪のほど恐ろしう、あぢきなきことに心をしめて、生けるかぎりこれを思ひなやむべきなめり、まして後の世のいみじかるべき思しつづけて、……　（若紫）

ここでいう「あぢきなきこと」とは、直接には藤壺への愛憐をさす。また「罪」は、藤壺愛恋にとらわれてしまっている罪業のことである。したがってこれは、浄土教的な観点から、死後の往生も不可能だとする現世執着の罪を恐れる意識である。後続の叙述によれば、その罪から逃れるべく僧庵の生活に憧れもするが、垣間見た少女紫の面影へと、その関心がそらされてしまう。彼の道心は紫の上の存在で留保されたことになる。あるいはまた、後に六条御息所の生霊が葵の上をとり殺した事件に遭遇して、次のように思う。

大将殿（源氏）は、悲しきことに事を添へて、世の中をいとうきものに思ししみぬれば、ただならぬ御あたり（愛人たち）のとぶらひどもも心憂しとのみぞなべて思さるる。　（葵）

「悲しきこと」は葵の上との死別をさし、「事」は御息所の生霊がとりついたことをさす。ここでは、妻の死を悲嘆するだけでなく、生霊にもなりかねぬ男女の愛執を厭うているのである。そのために、彼と関りあっている愛人たちすべての関係をも厭わしく思う。後続の叙述によれば、いっそ出家をしようとも考えるが、ここでも紫の上の可憐さにまぎれてしまう。いったい、こうした愛憐執着を否定するかどうかは、光源氏の本質である色好みを否定しかねない課題である。色好みによって反世俗の恋を次々と領略していく源氏は、しばしば一方ではこうした宗教的課題に苦悩せざるをえないのである。たとえば、絵合巻末の「今より後の栄えはなほ命うしろめた

し。静かに籠りゐて、後の世のことをつとめ、かつは齢をも延べん」という叙述がそうであるように、懸案のことがらが決着したようなところで、得体のしれない道心がふっとわき起こってくる。

神話的な色好みが、このような宗教的課題をかかえこむところに、神ならざる光源氏の人間としての苦悩がある。彼のあり方が本質的に貴種流離的であるとみなされるのは、その資質からこの俗界に反乱的であるというだけでなく、そこに生きている限りこのような苦悩を抱えこまねばならない存在でもあるからである。いわば、極楽に帰還すべき貴種が、この愛憐の世界にさまよい往生が危ぶまれているという趣である。この物語における貴種流離と色好みは、こうした救済の問題をかかえこむことによって、『竹取物語』や『伊勢物語』に比べて飛躍的なほど、明確な関連性を持つことになったといえよう。

そして物語は、その光源氏に道心を志向させながらも容易には出家に導かれないよう操作していく。しかし物語の進展とともに、女君たちの孤立化とともに源氏の厭世観は蔽うべくもないものとならざるをえない。六条御息所の死霊の出現がそれを決定的にした。彼の心底に沈降していた道心があらためて掘り起こされる体で、「女の身はみな同じ罪深きもとゐぞかしと、なべての世の中いとはしく」（若菜下）などの感懐が導かれていく。そして、次に起こる柏木・女三の宮密通事件に遭遇しても、あるいは夕霧・落葉宮の恋を見聞しても、むしろ当事者以上に人間の情念のすさまじさに恐懼するのである。その源氏が、母御息所の成仏を祈願する秋好中宮を相手に、「その炎なむ、誰ものがるまじきことと知りながら、朝露のかかれるほどは思ひ棄てはべらぬになむ。……」と語る。自らの色好みの人生を回顧しながら、愛憐執着の恐ろしさを思っている。かといって彼は、現世執着を清算していさぎよく出家に踏み切ることもできない。幻巻の一年は、最愛の紫の上の死への悲傷を語っているが、その深層には出家を敢行できない者の業の悲しみがひそんでいる。これは『竹取物語』の、異界に旅だつかぐや姫が人間的な「あはれ」の感動にからめとられるのに、対応しているともいえよう。しかしここには、かぐや姫を強引に引き立てたような異界の使者もいなければ、現世の心を喪わせる薬もない。あるのは、源氏の意思だけだ。それだけに彼の迷妄がきわだつ。幻巻の数多くの源氏の歌は、異界に旅立とうとして出離できぬ者の哀歌である。

『源氏物語』は、光源氏の色好みの美質という点で、『伊勢物語』よりはむろん、『竹取物語』よりも伝承の古層を多くかかえこんでいるといえるのかもしれない。しかし、そうであることによってかえって、統一的に持続する物語世界が造成されたのである。そのために、貴種流離の物語としての悲劇性がきわめて明確に構築されたともいえるであろう。

みてきたような貴種流離にせよ、色好みにせよ、単に神話や物語の話型の問題として処理されるべきものではあるまい。それらが、人間の心を語る発想形式として充実せしめられていくところに、物語の成立の歴史があるともいえるのではないか。

竹取物語・伊勢物語のことば

山口仲美

一　はじめに

『竹取物語』と『伊勢物語』は、ともに平安初期に成立した仮名文学作品であるが、そこに用いられている「ことば」は、かなり異質である。

この稿では、両作品の散文部分に専ら注目して、両作品のことばの性格を明らかにしておきたいと思う。引用文は、すべて日本古典文学大系本による。ただし、歴史的仮名遣に統一して示した。

二　荒々しいことば

『竹取物語』のテーマは、考えてみると、かなりロマンチックである。この世のいかなる男性とも結婚せずに、月の都に帰って行くかぐや姫は、男性の永遠の思慕の対象である。

ところが、実際の『竹取物語』の原文を読んでいる限り、むしろ一種独特の泥臭さを感じてしまう。なぜであろうか？

それは、物語世界を構築するために使われている「ことば」が、以下に例示していくような荒々しさとなまなましさとかたさを持つためと考えられる。

御迎へに来む人をば、長き爪して、眼をつかみ潰さん。さが髪をとりて、かなぐり落とさむ。さが尻をかき出でゝ、こゝらの公人に見せて、恥を見せん　（竹取物語、九）

かぐや姫の昇天を前に、憤る竹取翁のことばである。翁は、こう息巻いている。「かぐや姫をお迎えに来る人を、長い爪でもって目をつかみつぶしてやろう。そいつの髪を取って、空からひっかき落としてやろう。そいつの尻をまくり出して、大勢の役人に見せて、恥をかかせてやろう」。腹立ちまぎれの粗野なことばが、翁の会話文にうつし出されている。

さが髪　まず、憎悪の気持のあらわな「さが髪」「さが尻」の「さ」。「さ」は、「そいつ」と現代語訳されるような侮蔑の意のこもった代名詞である。当時の卑俗な会話語であったと察せられる。

『伊勢物語』には、むろんこのような野卑なことばは、見られない。さらに、『大和物語』や『平中物語』といった歌物語にあたってみても、『宇津保物語』や『源氏物語』を調べてみても、出現しない。俗語を含む『落窪物語』や『大鏡』といった作品にも、「さ」という荒っぽいことばは、やはり見られない。

かろうじて、院政期成立の『今昔物語集』に至ると、『竹取物語』の「さ」に連なると察せられる「しゃ」という語が見られる。たと

えば、次のように。

我君ミ、賤ノ者持テ侍レドモ、シヤ顔ハ猿ノ様ニテ、心ハ販婦ニテ有レバ、去ナムト思ヘドモ、　（今昔物語集、巻二八第一話）

浮気な男が、目の前にいる美女の気をひこうとして、自分の妻のことをあしざまに言っている場面である。男は、妻について「シャ顔ハ猿ノ様ニテ（＝そのつらは、猿の様で）」と言う。「シャ」は、相手や話題の人物について、卑める気持を込める接頭語である。『竹取物語』の「さ」と関係の考えられることばである。この「しゃ」は、中世になると、『平家物語』をはじめとする戦記物語にも用いられるようになる。

尻

また、引用した『竹取物語』の例文には、臀部を意味する「尻」という語もみられる。しかも、その「尻をかき出でて」とある。

典雅な平安文学作品にも「しり」ということばは見られる。しかし、その多くは、「後ろ」「あと」「後方」といった意味である。たとえば、『伊勢物語』の次の例のように。

女、いとかなしくて、しりにたちておひゆけど、えおひつかで、清水のある所に伏しにけり。　（伊勢物語、二四段）

三年間待っても音沙汰のなかった夫が、新しい男と結婚するその晩に、帰ってきた。女は、どうすることもできない。元の夫も、心優しい歌を残して寂しく去っていった。女は、たえきれずに、元の夫の後を追っていったが、清水のある所で倒れてしまった。文中の「しり」は、「あと」といった空間的な意味である。

また、優美な平安文学作品に見られる「しり」は、「ふでのしり」「御衣のしり」というように、「ものの末端」とか「衣服の裾」の意味である。

『竹取物語』の「尻」と同じく、具体的になまなましく肉体の一部を意味する場合は、『落窪物語』『今昔物語集』といった卑俗な面のある作品に限って出現する。たとえば、次のようである。

かいさぐりて、出でやするとて、尻をかゝへてまどひ出づる心地に、錠をついさして、かぎをばとりていぬ。　（落窪物語、巻二）

六〇歳近い典薬助が、醜態を演ずる場面である。「尻」は、臀部を意味している。

かなぐる

また、『竹取物語』の文例には、「かなぐる」という、激しく粗暴な動作をあらわすことばが見られる。「かなぐる」は、手荒くひきむしるようにすることである。現代語にも残っており、「恥も外聞もかなぐり捨てて」などと言う。「かなぐる」は、優雅な貴族たちの、最も嫌う行動様式をあらわすことばである。

事実、「かなぐる」行動をする人物は、『源氏物語』では、物怪となった六条御息所、品のない恐ろしい乳母、一人前でない幼児である。そして、『源氏物語』では、「かなぐる」動作は、身分の高い人に対して、してはならぬ失礼なふるまいとして描かれている。

迎えの天人たちを、「かなぐり落とさむ」とわめく竹取翁は、たしなみのある人間なら口にしないようなことばを使っている。

『竹取物語』には、こうした荒々しいことばが随所にちりばめられており、その例は、枚挙にいとまがない。もう一例あげてみる。

よく捕へずなりにけり。かぐや姫てふ大盗人の奴が、人を殺さんとするなりけり。　（竹取物語、六）

自ら、龍の首の玉をとりに行って、危うく命をおとすところであった大伴大納言の会話文である。もはやかぐや姫への情熱もすっか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com